

## 被災53周年 ビキニデー・アピール（案）

1954年3月1日、米国がマーシャル諸島・ビキニ環礁で行った水爆実験は、大量の「死の灰」をまき散らし、近海を操業中の静岡県・焼津のマグロ漁船「第5福竜丸」が被災し、無線長の久保山愛吉さんが放射能症で亡くなりました。同時にマーシャル諸島でも多くのヒバクシャを生み出しました。

53年を経たビキニでも、原爆投下から62年を経たヒロシマ・ナガサキでも、放射能の後遺症に苦しめ続けられています。それは2世・3世までも「受け継がれて」います。終わらぬ核の悲劇が面々と続いているのです。

ビキニでの被害は、広島、長崎での原爆の被害を受けた戦後間もない日本に大きな衝撃と恐怖を与えました。

しかし、ここから人々は立ち上がり、思想信条を超えた原水爆禁止運動の出発点ともなり、全国に、全世界に、燎原の火のごとく反核の炎は燃え広がりました。

ビキニから半世紀以上を経た今日、核と戦争の時代とも言われた20世紀は終わり、私たちは21世紀に立っていますが、残念ながら核という負の遺産はいまなお引きつったままになっています。それどころか、米国、ロシアは臨界前核実験をくり返し行い、NPT（核不拡散条約）を骨抜きにするように米・インド原子力協定の推進、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）による核実験、イランの核開発は、人類に大きな脅威と核拡散の脅威を与えています。同時に、アジアでの軍事的緊張を高めています。

とくに核超大国・米国ブッシュ政権は、先制核攻撃も辞さぬ好戦的な戦略の中、小規模核兵器の新規開発、日本を巻き込んだMD開発など、歯止めなき核の推進で世界を混乱とさせています。「唯一の被爆国」と自称する日本政府も、米国の「核の傘」の下、同調・追随姿勢をとっています。日本政府こそ世界の先頭に立って核廃絶を推進しなければなりません。しかし現実には、危険なプルスーマル計画など原子力・核開発を強力に進めています。

このように、平和に対する脅威が進行する中で、あらためてビキニ被災の意味と私たちの運動の意義が問われています。これ以上の「ヒバクシャ」をつくらせないための不断の努力を積み上げていきましょう。

「核と人類は共存できない」。原水禁運動の中で噛みしめてきた言葉です。核廃絶、被爆者援護、脱原発などの課題を新たな決意で前進させていきましょう。

沖縄は、「核貯蔵疑惑」が復帰35年続いています。劣化ウラン弾が40万発も貯蔵されていたことも明らかにされています。

私たちは53年前のビキニでのこの日、第5福竜丸の久保山愛吉さんが残した人類への遺言とも言える「原水爆の被害者は私を最後にしてください」という言葉、そして広島、長崎に思いを起し、被爆者と共に、沖縄から核も戦争も基地もない21世紀を創る決意を強くアピールします。

2007年3月1日

被災53周年 ビキニデー沖縄県集會